

随想

5年ぶりの中国

佐々木 教祐

昨年、9月22日から10月6日まで中国科学院生物物理研究所の梁棟材教授と常文瑞教授のお招きを受けて5年ぶりに中国の北京を訪れる機会があった。両先生とは20年来のお付き合いで今回は共同で進めているタンパク質 X 線結晶構造解析研究の打ち合わせが主な目的であった。滞在した2週間に北京大学、清華大学を始めとするいろいろな所を訪れる機会があったので中国の印象を書き留めておきたい。

北京事情

北京での朝と夕方の自転車の洪水は以前ほどではないにしてもまだかなり多い。それは日本のように郊外から電車で通勤してくる人が少なく、サラリーマンは勤め先の近くの高層アパートに住んでおり、交通手段としては自転車が最も便利なのである。そんなわけで昼食も家に帰って食べる人が多い。自転車が少なくなった以上に軽や小型の中古車が多く、道はどこも渋滞している。私が乗せて貰っていた研究所のマイクロバスも古くてときどきエンジンが止まってしまうが、運転手は慣れたものですぐに直して動かしていた。

バスは安くて沢山あり市民の足になっているが、地図が頭に入っていない旅行者には向いていない。その点地下鉄は北京市内を一周する環状線と天安門近くから西に走る2系統しかなく分かり易いが、ホテルが駅の近くでないとは不便だ。旅行者の足はやはり軽か小型のタクシーでどこでも拾えて安い。

中国は今年1999年が建国50周年に当たるとのことで北京の町の整備工事が進んでいた。天安門近くの最もにぎやかな王府井(ワンフーチン)通りを舗装する工事も進んでいた。ここには北京飯店(ホテル)、百貨大樓、外文書店など有名な店が並んでいる北京で最もにぎやかな通りであるが、道全体を一度に掘り起こして工事が行われていた。一挙に工事を行い無駄を省く中国的なやり方である。買い物をする人は穴に落ちないように注意しながら行き来していた。こんなやり方が良いとは言わないが、日本のように電気、ガス、水道工事が別々に掘ったり埋めたりを繰り返す無駄を早くやめて貰いたいものである。これで

はいくらお金を使っても社会資本の蓄積にはほど遠いように思われる。

町を歩いていると所々に小さな市場が目につく。不揃いで土のついたままの野菜やむき出しの肉、山積みのリンゴ、水槽に入った生きのよい川魚など様々な物が売られている。そのほか、コンビニのようなパック詰の物を売るきれいな店も所々にできており、古い店よりもはやっているようであった。中国語が話せない我々にとっては、物を手にとって見ることができるし値札もついており、清潔なので大変有り難かった。果物は道路で売っているものが安くて新鮮だった。桃、リンゴ(最近フジが人気とのことだが、日本のものより甘みは少ない)、みかん、バナナ、ブドウ、白瓜と豊富にあったが、柿は柔らかいものしかなく日本の富有柿のような柿を探したが見つからなかった。しかし甘さは日本のものに比べるとどれも物足りなく思えた。食べ物で以前に比べて大きく変わったところは、食材が新鮮になったことである。以前行ったとき自由市場に売っていた魚を見て油を通さないと食べられないから中華料理は何でも油に通すのだなァ、と納得したのだが、今回食べに行った店では食材を自由に選ばせるほど新鮮な魚介類が並んでいた。昔からやっているという麺の店に連れて行って貰った。粉で団子を作り包丁で削って作る刀削麺は、麺と呼ぶには太すぎるが歯ごたえとボリュームがあり、食べきれなかった。北京の町は食べ物の種類も量も豊富で安く美味しく、どの店も賑わっていた。これを見ていると中国の食の豊かさが肌で感じられた。若い人たちの服装は日本の若者と比べても違和感は感じられなかった。

天安門近くの旧市街地はまだ整備中であるが、片道3～4車線の広い道路ができており、万里の長城の観光用の登城口になっている八達嶺は北京から80キロくらい離れているが、有料高速道路を使うと一時間ほどで行くことができる。高速道路はこのほかに空港を結ぶものを含めて4本ができています。高速道路は混んでいないがそこまでの道路はいつも渋滞している。

いろいろな名前の大学の看板があちこちに見られたが、昔からよく知っている大学では、前に来たときとほとんど変わっていない落ち着いた雰囲気のある北京大学と建設中の高層ビルが建ち並んでいる清華大学の対照が目立っていた。清華大学はどちらかというと工学を中心とした大学で中国産業発展の人材育成と技術開発の核として拡張しているように感じられた。どちらの大学も立派な図書館があり、見学コースの最初は図書館から始まった。

(名古屋大学情報文化学部教授)